

②残された命もあと僅かだが、少しでも歴史を風化させず真実を後世に伝えたいと思った。以上

シベリア抑留体験談

三重県 森 川 長 成

私は、昭和十六（一九四一）年徴集、現役兵として十七年四月、広島集合にて満州に渡りました。

二十年八月、前任地、下城子より朝満国境図們に下り、陣地で一発の弾も撃たず終戦を迎えました。

その後、延吉に集結され、二十年九月初め、二百キロ行軍の後シベリア鉄道経由、十月九日アムール河畔のコムソモリスク第五分所に收容されました。シベリア抑留大半の犠牲者はこの十月から翌年の三月頃までの期間がほとんどと思います。忘れもしません。一月十九日、千二百人ほどおりました收容所で一日に十九人亡くなりました。十日で百九十人、一カ月で六百人と悲惨をきわめました。様々な事柄が不幸にも重なり

合った結果ですが、本当に地獄を見る思いでした。

抑留の不当性については種々話されておりますので、私は食の真について体験を話します。

三月に入りまして中隊から炊事に行くようになりました。千六百人ほどおりまして、四カ所に分かれて炊事をしておりました。一番大変なことは、各班による分配の情けない実状であります。十五人程度としますと三十の眼がにらんでいます。パンが厚い、薄い、本当に人間の不信感をもたらす一番の弱点、食べる、この繰り返しです。

ここに一人の男がおりました。同じ連隊の一年上、東京出身の白井伝五郎と申します。「このままでは、若い兵隊や補充兵のオッサンを殺してしまおう。連隊炊事をやろう。手伝え」と、協力を求められました。

四月に入り一時炊事を離れ、左官、大工、料理人等十二人ほどでチームを作り準備を始めました。

まず第一に材料がありません。毎日作業に出ている所を探しました。煉瓦工場、タイル工場、ジュラルミン工場等です。主対象にしてパン一本を五十片に切り

収集を始めました。

「案ずるより産むが易し」関東軍は泥棒でも日本一、五月末に煉瓦四千枚、食器四百食分揃い、大きなかまども完成。食券にて個人配分、食堂で食事をする連隊炊事を七月にオープンしました。個人間の不信感を取り除くことによって何十人の生命を永らえることができたかは、お察し下さい。この事は人生経験、社会経験の乏しい十五、六歳の年代において発想し実りする私の生涯の忘れ得ぬ人となっております。

この結果、その後の抑留生活の中で食事、生活、労働等の大きな人間間の摩擦もほとんどなく帰国を迎えられたと思っております。

最後にしばらく時間をいただきます。

ここに一冊の本があります。『プリンス近衛殺人事件』です。偶然ですが近衛さんとは同じ連隊で、一緒に三年ほどおりました。会長の坂口さんは将校仲間としてご一緒でした。エピソードは色々あります。この本において、シベリア抑留の不当性、民族性の違いを考えていただきたい。一種の内部告発に近い内容であ

ります。

平和条約は北方領土問題、シベリア抑留の解決なくしては成立しません。このような相手ですから時間が要ると思います。北方領土は何年、何十年かろうとも物理的に存在し続けます。

今、三十万人ほど残っておりますが、平均年齢七十八歳になります。余命ありません。

思い出しますシベリア生活。アクチーブのとき、政治部将校と論議したとき彼は言いました。「主張するのは良い、宣伝はいけない」私も宣伝しているわけではありません。

今、私は八十歳。伊賀の山奥で農業をしております。力も能力も方法も知りません。でも、余命続く限りシベリア抑留の不当性を主張し続けます。